

愛珠幼稚園の

史料倉庫を訪ふ

新庄よしこ

寒暖程よき折柄の氣候を幸いに関西の方に出かけることになった。米原の菩提寺には琵琶湖をはるかに見渡して山の中腹に両親の墓がある。その法要のため一族が集ろうという。この殊勝な思いたちは、聞えもよいし、又一つには長い間いろいろの事情で相逢う機会もなかったお互いが、親しく語りあえるという喜びで思いの外多く集ったが実は云はず語らずの一つのねらいがあった。この辺一帯の山々には松の木が多い。この根もとせずに土を持ち上げて、秋の香を漂はせている松茸をさぐり当てようという。先年はそのとりたてを、かき集めた落葉の火で賞味したというのは、残念

ながら今回は話だけで終ってしまったが。かくて滞りなく行事も終えて住職一家の心からのもてなしに感謝しつつ一同と別れて、東に来るべきを更に西へと向い、その夜は京都に泊った。私は思う通りの段取りに段々近くなってきたなと一人で喜びながら。

実はこの企てに誘われた時、私は行ってみようかと決めたのは、米原迄行くなら一足のばして大阪の愛珠幼稚園をお訪ねして、かねてお願いしてあることにつき、手紙だけでは礼を欠くような気もしたので御挨拶をしたい、勝手ながら史料も拝見したいという願いが強かったからである。一緒に来た娘夫妻は久々に京都の名所行脚、殊に新装の金閣寺を見せて親孝行でもしようと思つらしく、時間やら乗物やらと計画している。それにも行ってみたい、然し私は私で、愛珠に行こうと決めてから前もって一文お願いし、日時が決っているので、これは守らねばならぬ。さてどうしようか、なんばなんでも、私は勝手にするからどうぞおかまいなくとも云えない。格屋の一室

で膳碗、ふすま、さては敷物に迄それぞれ形で柵が描かれ染めぬかれていたのを眺め眺め、思い切つて私の考えを話してみた。あなた達の気持はほんとうにありがたい、金閣寺を見たいのは山々であるが、こういうわけだから此度の見物は二人だけで行つて私の好きなようにさせて頂戴という次第で、別れ別れでいそいそと大阪に向つた。

さて、いよいよ愛珠の玄関にはいった。いろいろのものがめにつく、今どきこんな幼稚園があるのかしらと、參觀心理とでもいうのか、心の中だけではとてもきよろきよろしてしまった。やがて、園長中村道子先生は幼児の一群の中から走つてこられようこそようこそとまず堅い握手で迎えて下さった。初対面という順序はふむ余地もない。嬉しかった。何はともあれ、定められたことのように私を史料の倉庫にと案内して下さい。お茶の水幼稚園にあった原画は火災にあったので今はこちらに保存されているのが何よりの宝である。まずめにつく幼稚園二十遊嬉の図、衣食住の図十二枚、

色彩が八十年をもの語りながらそのまゝ額
になっている。幼稚園関係者にとっては雪
舟、探幽にもまさる絵画であらうかなどと
自分だけで思ってみる。この外関係古書数
十冊、ここに一々を挙げられないが、明治
唱歌幼稚の曲という小冊子は子どもの遊戯
を錦絵風に描き一方に歌詞が書いてある。

当時ありのままの書名であるが今見ると何
と、時代内容をあらわすよい書名ではない
か、ここで私は、幼稚園で用いてきた楽器
の変遷を先生から教えられた。現代一般に
使っているピアノになる迄はどんな経路を
辿って来たか、最初が和琴（わごん）とい
い、普通の琴の小さい形、絃は六本、但し
この音は弱く、幼児が喋々、風車などを歌
うその合間にチャランチャランと合の手を
入れる程度、むしろ先生のうつ手拍子の方
が音響としては強くもあり、心と心のつな
がりも親しみがこもり、うたい易かったら
しい。次がざみせん、と中村先生は云われ
た、三味線のごく小型のもの、ひくのはバ
イオリンの弓と同じく、ばちではない。次
手に風琴がこれに代っている、この辺から

大分洋風がはいつて来ているのは時代の影
響か、ふちのかざりなどいかにも外国め
いている、こんな工合でしようねと音楽に
堪能な先生はちょっと弾いて下さった。つ
づいてバイオリン、その次にオルガン、
ピアノとなってきたわけである。

これらを一々懇切に説明して下さる先生
はこの日は丁度幼稚園としての催しがある
との事で、格別お忙しいらしい。電話はか
かってくる。父兄は次々とあいに来る。こ
の御用の合間を見ては、飛び歩くようにし
て説明して下さる。園舎のこと、庭のつく
ばいの流れ、愛珠という名称のいわれ、書
いても書いても書き切れない。お会いして
いてしみじみ思った事は、これらの史料に
対しみちんも私心を持たれず、あたかも全
日本の幼稚園のものであるような非常な寛
大なころをお示し下さった事はいかにも
忘れられない。この品々が、今は大切に倉
庫に秘蔵されてはいるが、当初より時移
り、人変る毎に、必ずしもかく迄の愛情と
熱とを持って守り続けられてきたとは言い
切れない。親しくお会いして見て、この先

生なればこそあの史料とこの先生との深い
つながりがかくあらしめたのはお人柄の然
らしむるところと感銘を深くした。そし
て、そつと思いを東に移して思ったこと、
お茶の水幼稚園の明治九年からの歩みが、
この愛珠幼稚園と同じように今日、人を得
た幸いを持っていて、これから将来の幼稚
園史の貴い存在となるであろうというこ
と。又日本の各地方の幼稚園が夫々その沿
革生い立ちを持たれている筈、一見何でも
ないことのようにあつて、その一つ一つが
発達史の貴い一枚となるであらうから大事
に保存されたいと祈ったわけである。

始めから愛珠へ行くと決めて出かけたわ
けではなく、この機を幸いに行をのぼして
みたいと考えたので、かくもかねての思い
を果して帰途についたことはまことにうれ
しい旅であった。

×
× ×
×